



2019(平成31)年4月25日発行

発行/大阪大学医学部附属病院広報委員会(総務課)

住所/〒565-0871大阪府吹田市山田丘2-15

TEL/06-6879-5021

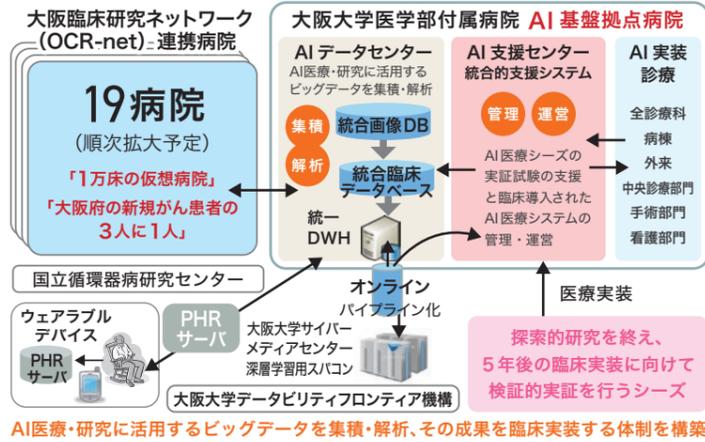
<http://www.hosp.med.osaka-u.ac.jp>

禁転載(この紙面は再生紙を使っています)

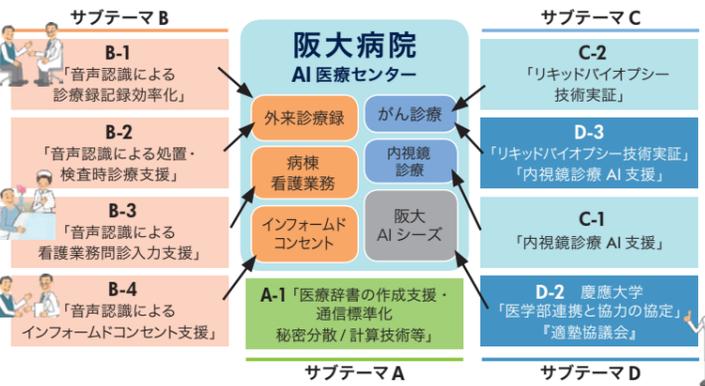
医師・看護師の負担を軽減し、「より高度な患者さん本位の医療」を実現。

AI 基盤拠点病院構想

阪大病院「AI基盤拠点病院」全体構想図



阪大病院「AI基盤拠点病院」体制図



近年、医療は急激に専門化・複雑化してきており、医師だけでなく、患者さんやご家族も、最先端医療に関する知識を得る、あるいは理解することが難しくなっています。本院は、院内業務や医療データが高度に情報化された「インターネットホスピタル」

AI技術の駆使し病気の超早期・超精密診断を。技術の駆使により、さらにAIの超早期・超精密診断、より患者さん個人に適した治療の選択などにつなげたいと考えています。AIのサポートにより医療従事者の業務を軽減して時間的余裕を作り、医師と患者さんとの対話を増やすことも目標のひとつです。より充実したインフォームドコンセント

一部診療科で実証実験を開始しているのが、音声による電子カルテの入力です。自動音声入力を導入することで、医師は患者さんとアイコンタクト(視線を合わせる)を取りながら十分に対話でき、結果として診療の精度も向上します。

本院は平成30年10月より、AI(人工知能)基盤拠点病院(AIホスピタル)モデル病院構想の実現に向けて、さまざまな研究・開発の取り組みをスタートさせています。これは、内閣府・戦略的イノベーション創造プログラム(SIP)「AIホスピタルによる高度診断・治療システム」の一環で、病院全体をAI化することで高度で先進的な医療をめざすとともに、業務の効率化を図り、現在の医療が抱える問題を抜本的に解決しようとするプロジェクト。すでに4月から、AIを活用した診療記録システムなどの実装実験が一部の診療科で始まっています。

医師が病状や治療方針を分かりやすく説明し患者の同意を得ることの実施、業務の効率化による患者さんの待ち時間の短縮など、患者さんと医療従事者双方に役立つAI医療システムを開発し、全国に先駆けて現場に導入していきます。

また、AI技術を活用した画像解析により、腫瘍などの超早期・超高精度診断も目指しています。AI医療には膨大な臨床データ(ビッグデータ)の蓄積と解析が必要ですが、本院は大阪地域の19病院とOCRネット(大阪臨床研究ネットワーク)を構築し、研究用の医療情報のデータベースを構築しています。有用な医療ビッグデータを基盤としたAI診断システムを開発・導入することで、人間の眼では見分けることが難しいレベルの変化も検知できるようになります。

AI基盤拠点病院構想を推進するため、平成31年4月から「AI医療センター」も発足しました。AIを医療現場に導入するために必要な医療データを効率的に収集・蓄積・解析するためのコンピュータ&通信環境などのインフラ整備を行っています。本院はAI基盤のモデル病院として、これまで以上に高度な診療と医療過誤の防止、十分な患者さんとの対話を両立するため、さまざまなAI技術とシステムの開発・実証実験を進めています。医療の世界が大きな変化を遂げようとしている今、AI医療を推進することで、日本の医療のレベル向上にも貢献していきたいと考えています。

医療データを収集・解析するAI医療センターが稼働

公共交通機関ご利用のお願い



日頃から患者用駐車場が混み合い、大変ご迷惑をおかけしております。本院の患者用駐車場は、駐車台数に限りがあり、入庫するまでに時間がかかる場合がございます。つきましては、公共交通機関にて来院可能な方は、大変ご不便をおかけいたしますが、混雑緩和のため公共交通機関をご利用いただきますようお願い申し上げます。

オンコロジーセンター 第10回 阪大がんサロンを開催しました

2月12日、オンコロジーセンターがん相談支援室主催で、大阪大学大学院人間科学研究科 准教授 平井啓先生を講師にお招きし、「主治医とのコミュニケーション」というテーマで第10回阪大がんサロンを開催しました。患者と医師はなぜすれ違うのかを行動経済学の視点から解説し、どうすれば主治医とコミュニケーションが円滑に図れるのかを、具体的な事例を交えてお話いただきました。参加者からは「悩んでいることのメカニズムが理解できた」「是非サロンでも問題解決療法を体験したい」などのご意見をいただきました。こうしたご意見を活かすことができる企画を現在検討中です。がん相談支援室では定期的に様々なテーマのがんサロンを開催しています。

患者と医師はなぜすれ違うのかを行動経済学の視点から解説し、どうすれば主治医とコミュニケーションが円滑に図れるのかを、具体的な事例を交えてお話いただきました。

5/21 がん治療による外見変化にお悩みの方向け「メーキャップ講習会」

日時 2019年5月21日(火) 13時~15時
場所 オンコロジーセンター棟5階 キャンサーボードホール
対象者 当院で治療中のがん患者さん及びご家族(男性も大歓迎です)
申込先 がん相談支援室 06-6879-5756

平成30年12月に放射線部一般撮影室の2室小児撮影室、骨撮影室およびCT装置の1台がリニューアルされました。新しい一般撮影室の撮影システムは従来に比べ優れた検出器を採用し最新の画像処理技術を用いているため、低被ばくでありながら高画質な画像が得られるようになりました。また、2室ともに様々な部位を撮影することができるようになりました。多用途な撮影ができる装置が増えたため、以前よりご迷惑をお掛けしておりました待ち時間の短縮が図れています。さらに、長尺撮影システムを導入し、120cmの範囲を1回の撮影で写すことが可能となりました。脊椎撮影では頭から股関節まで、下肢撮影では股関節から足首までを1回で撮影できるようになり、側弯症やO脚の診断などに貢献しています。また、検出器を斜めにすることで、腰の曲がった方も、そのままの自然な体勢を写すことが可



小児撮影室



新しいCT装置

能となりました。CT装置の1台も最新型に更新しました。新しいCT装置の特長は、これまで高精度の画像を得られなかった広範囲1回転撮影(通称ポリリウムスキャン)を精度よく行えるようになったことです。画像の精度が要求される脳神経領域、短時間撮影が求められる心臓や小児の領域で効果を発揮します。また、高精度の画像と組織コントラストの識別に効果的なデュアルエナジーCT撮影を組み合わせることで臓器の識別精度が飛躍的に向上しています。これまで困難であった淡い血流の変化や脂肪組織の識別に効果を発揮します。

一般撮影室・CT装置をリニューアル



平成30年度

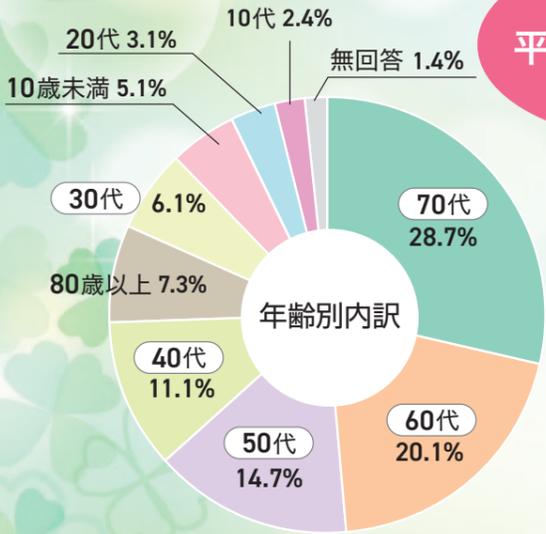
「満足度」調査

結果発表!



入院患者さん

●調査対象の内訳



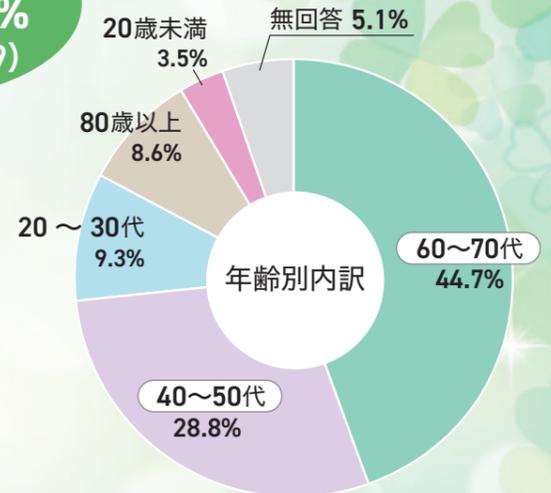
入院患者さん
平均 **92.6%**
(回答数=702)



外来患者さん
平均 **88.2%**
(回答数=3,089)

外来患者さん

●調査対象の内訳



入院患者さん 満足度ランキング

1位	リハビリ職員の態度や言葉遣い	99.2
2位	薬剤師の態度や言葉遣い	98.7
3位	検査職員の態度や言葉遣い	98.5
4位	医師の態度や言葉遣い	98.2
5位	職員の身だしなみ	98.1

1位	トイレや浴室	74.4
2位	インターネット	78.1
3位	エレベーターや廊下	79.2
4位	苦情の受付場所	81.5
5位	食事	83.1

●調査期間

外来：平成30年9月3日～7日の5日間
入院：平成30年10月2日～22日の21日間

●調査結果

外来患者さんの88.2%、入院患者さんの92.6%の方に、「満足」「やや満足」のご回答をいただきました。満足度の低い項目は、外来では「駐車場整備等」「会計や診察の待ち時間」、入院では「トイレ・浴室設備」「インターネット環境」「エレベーター待ち時間等」でした。

これからも患者さんにとって心地よく、治療に専念できる環境を整えていきたいと考えております。より多くの患者さんのご意見を伺いたいと思っておりますので、今後ともご協力のほどよろしくお願いいたします。

外来患者さん 満足度ランキング

1位	診察室の清潔かつ整理整頓	97.3
2位	医師のプライバシー配慮	96.8
3位	医師の態度や言葉遣い	96.4
4位	技師の態度や言葉遣い	96.2
5位	看護師の態度や言葉遣い	95.8

1位	駐車場の広さや台数	51.3
2位	会計の待ち時間	52.7
3位	診察までの待ち時間	58.3
4位	会計待ちでの声掛け等の配慮	76.2
5位	診察待ちでの声掛け等の配慮	78.9



英語併記に改められた看板。引き続き院内表示の多言語化に取り組みます。

外国人患者受入れ医療機関認証制度 (JMIP) 更新が認証されました

1月22日、23日の2日間に渡り、外国人患者受入れ医療機関認証制度(JMIP)の更新審査を受けました。JMIPは、外国人患者の受入れに資する体制を第三者的に評価する制度であり、本院は2016年3月に国立大学病院で初めてとなる認証を受けました。認証の期間は3年間であるため、改めて今回、更新審査を受けました。

多言語による「受入れ対応」、異文化・宗教に配慮した「患者サービス」、外国人患者に対応する「医療提供の運営」、外国人患者の受入れを拒当する「組織体制と管理」、外国人患者のニーズに対応する「改善に向けた取り組み」の5項目について、書類調査、担当者合同面接、院内ラウンドによる審査が行われました。院内ラウンドでは実際に外来、病棟や受付を訪問し、外国人患者への対応に関するヒアリングや、院内表示及び書類の多言語化の確認等が行われました。

調査後の講評では、小さな課題はいくつか指摘されたものの、「重病・重症の外国人患者の受け入れ体制がしっかり」と高く評価を受け、3月1日付で認証を受けました。

今後、本年6月にG20、9月にラグビーワールドカップ、来年には東京オリンピック、さらに2025年には大阪万博などの開催を控え、外国人が増加すると思われ、本院では、在留外国人や、日本の医療を求めて来日される外国人患者が、言葉や文化の障壁を感じずに安心して医療を受けていただけるよう、今後も医療の国際化への対応に取り組みまいります。



発生した時には、災害対策本部を自動的に設置することによって、高度救命救急センターの当直職員により、センター内看護師詰所に「臨時災害対策本部」を設置して、院内の人的・物的被害情報や病棟の当直職員から収集する情報とともに、防災センターやエネルギーセンターから院内のエネルギー源の障害発生情報を収集しました。さらに自宅等から自主参集してくる職員

の受け入れ・役割指示を行う部署を立ち上げ、災害負傷者を受け入れ、医療対応を実施するための「救護所」を設置する実働訓練を行いました。災害対策本部や救護所などの設置は、看護宿舎等から参集してきた職員により地震発生から30分以内に設置することができました。10分間の振り返りタイムで設置に携わった参集職員から、良かった点、悪かった点、どう対応すれば良かったか等意見集約を行い、15時10分から後半の訓練に入りました。

後半は医学部保健学科の学生に模擬患者として協力いただき、災害負傷者のトリアージ、救護所での医療対応訓練の他、臨時災害対策本部から移行した災害対策本部で、院外インフラ障害の間接的影響や院内インフラや医療設備の

12月12日14時半より、勤務時間外の時間帯(23時)に上町断層地震(最大震度7)が発生したとの想定で完全オンライン方式の訓練を実施しました。大阪府内で震度7の地震が

最大震度7 防災訓練を実施しました

機能障害が発生している状況下で、最大限の医療対応を行うためにどう対応すべきかの意思決定を行う等、実践的な訓練を行いました。

今回の訓練で得られた教訓については、業務継続計画の見直しに反映させ、災害拠点病院としての使命を果たせるよう努めてまいります。



2019年度 優秀標語表彰式



今年度の標語が決定 接遇・マナー向上を目指して

3月12日、病院長室において、木村病院長から4名の優秀標語作成者に表彰状と副賞が授与されました。
患者サービスクomiteeでは、職員の一入ひとりが患者さんの立場に配慮できるような努めるとの主旨で、接遇・マナー向上に関する標語を掲げております。
このたび、院内に標語を募集し、患者サービスクomiteeで検討の結果、次のとおり優秀作品が決定いたしました。
なお、応募者全員に参加賞が渡されております。

1~3月期

「挨拶と 手洗いで示す プロ意識」
(小児科 助教 谷口 英俊)

10~12月期

「そのひと言 相手の立場で 考えて」
(医事課情報処理係 係員 阪本 陽子)

7~9月期

「ひと呼吸 増える安心 減るリスク」
(医事課情報処理係 係員 山口 恭平)

4~6月期

「温かな 笑顔で創る 療養環境」
(看護部 副部長 佃 順子)

「病院教授」の称号付与について

病院教授の称号は、大阪大学医学部附属病院における診療・研究・教育の充実のため、特に臨床面で優れた業績が認められる者に対して付与しているものです。

2019年度は下記の24名に「病院教授」の称号を付与することを決定しました。

番号	診療科等名	氏名	職名
1	循環器内科	彦惣 俊吾	准教授
2	免疫内科	檜崎 雅司	講師
3	血液・腫瘍内科	柴山 浩彦	准教授
4	心臓血管外科	戸田 宏一	准教授
5	消化器外科(下部消化管、肝、胆)	江口 英利	准教授
6	消化器外科(上部消化管、膵)	山崎 誠	准教授
7	乳腺・内分泌外科	金 昇晋	准教授
8	眼科	松下 賢治	講師
9	耳鼻咽喉科・頭頸部外科	小川 真	准教授
10	整形外科	村瀬 剛	准教授
11	皮膚科	金田 眞理	講師
12	神経科・精神科	田中 稔久	准教授
13	小児科	三善 陽子	准教授
14	泌尿器科	今村 亮一	准教授
15	放射線診断・IVR科	大須賀 慶悟	准教授
16	臨床検査部	日高 洋	准教授
17	手術部	南 正人	准教授
18	放射線部	田中 壽	准教授
19	集中治療部	内山 昭則	准教授
20	輸血部	富山 佳昭	准教授
21	高度救命救急センター	小倉 裕司	准教授
22	臨床工学部	高階 雅紀	講師
23	化学療法部	水木 満佐央	准教授
24	未来医療開発部	名井 陽	准教授

※上記の称号付与者の職名等は平成31年4月1日現在のものです。

新診療科長等ごあいさつ



●緩和医療センター長
どき ゆういちろう
土岐 祐一郎

平成31年4月1日より設立された緩和医療センターのセンター長を拝命しました。がん、心不全、小児がんの3つの部門で患者さんの精神的、肉体的な苦痛の緩和とQOLの向上に向けて、医師、看護師、薬剤師、医療ソーシャルワーカー等によるチームアプローチを行っています。今後の医療のニーズの多様化に向けて従来より各部門において分散して行われていた緩和ケアをセンター化することにより充実を図りたいと思います。新たなセンターですので皆さまのご意見とご支援をよろしくお願いいたします。
(平成31年4月1日就任)



●呼吸器外科長・呼吸器センター長
しんたに やすし
新谷 康

呼吸器外科では、肺がん、転移性肺腫瘍、重症筋無力症、縦隔腫瘍など呼吸器疾患全般の外科診療を行っています。また、当院は肺移植実施認定施設であり、移植医療にも大きく携わってきました。さらに、患者さん本位の治療を行うために、呼吸器外科、内科、放射線診断・治療科が密接に連携した呼吸器センターで診療を行っており、ひとつの入院病棟で呼吸器疾患の診断から治療まで迅速に移行できることが特徴です。呼吸器疾患の専門的な知識をもった看護師・理学療法士を加えたチーム医療によって、安全で丁寧な診療を心掛けたいと考えています。今後も、呼吸器疾患の診療研究拠点として責務を果たせるよう尽力してまいります。
(平成31年4月1日就任)



●疼痛医療センター長
きしま はるひこ
貴島 晴彦

「痛み」は、患者さんの訴えに依存する症状です。他人が安易に大丈夫、痛くないと判断してしまえば正しい診断や治療を導くことはできません。本センターは、痛みに関する疾患や病態の専門医の集団です。麻酔科、脳神経外科、整形外科、神経内科・脳卒中科、神経科・精神科、薬剤部、リハビリテーション部、看護部などが連携し、患者さんの訴えに耳を傾け、その背景、原因を詳細に検討し、薬物、心理、外科的手法を用いて多角的に治療したいと考えています。
(平成31年4月1日就任)



●形成外科長
くぼ たつき
久保 盾貴

平成31年3月より形成外科長を拝命いたしました。形成外科では、多指症・合指症・唇裂口蓋裂などの先天性外表異常、そして、癬癩・顔面外傷・熱傷・下肢静脈瘤・皮膚皮下良性腫瘍・皮膚悪性腫瘍・眼瞼下垂・皮膚潰瘍・顔面神経麻痺などの後天性外表異常を対象疾患としています。それら以外にも、診療各科から乳癌・頭頸部癌・食道癌切除後の欠損や縦隔炎など実に様々な疾患の治療依頼を受けて対応しています。今後は、形成外科独自の疾患だけではなく、診療各科との共同治療もますます充実させ、本院の発展と社会への貢献に邁進したいと思っております。
(平成31年3月1日就任)



●呼吸器内科長
たけだ よしと
武田 吉人

このたび呼吸器内科長を拝命いたしました。肺癌や慢性閉塞性肺炎、呼吸器感染症は世界死因の上位にランクし、呼吸器内科医の重要性は益々高まることが予想されます。肺癌に対する分子標的剤や免疫療法などの個別化医療だけでなく、喘息や間質性肺炎に対する新規薬剤など治療は著しく進歩しています。
当科では、最先端の治療を提供するとともに安全に配慮した丁寧な診療を心がけたいと考えております。呼吸器センターにおける集学的治療や移植医療、地域連携にも、スタッフ一同で積極的に取り組みたいと思っております。何卒よろしく申し上げます
(平成31年4月1日就任)



●皮膚科長
ふじもと まなぶ
藤本 学

このたび、皮膚科長を拝命致しました。皮膚科では、アトピー性皮膚炎や皮膚がんなど様々な領域で新規治療が急速に進展し、従来のステロイド外用薬に依存した治療から大きく変貌してきています。私自身は、強皮症や皮膚筋炎などの膠原病をライフワークにしており、免疫内科をはじめとする各科の先生方のご指導を頂きながら、最先端の医療を提供できるよう取り組んで参りたいと思っております。また、薬剤性皮膚障害などへの迅速な対処などを通じて病院の医療の質の向上にも貢献して参ります。何卒よろしく申し上げます。
(平成31年4月1日就任)

PHOTO ホスピタルミニ・ニュース TOPICS

4月1日

ミーティング・ザ・プロフェッサーを開催



初期臨床研修開始日の4月1日、新研修医歓迎会「ミーティング・ザ・プロフェッサー」を14階スカイレストランで開催しました。この催しは研修医と教授との親睦を深めることを目的に毎年行っているものです。研修医が自己紹介で今後の抱負を述べ、引き続いて交流の場となりました。研修医が教授に研修内容やキャリアパス等を相談する、研修医がお互いに交流を深める、など和やかな光景が見られ、本院での臨床研修がスタートしました。

春のミニコンサート

4月12日



4月12日(金)、外来棟エントランスホールで、大阪大学アカペラサークル「うたゆい」の皆さんによる「春のミニコンサート」を開催しました。

1月20日

「未来医療フォーラム～大阪大学医学部附属病院の取り組み～」を開催



1月20日、ハービスOSAKAハービスHALLにて「未来医療フォーラム～大阪大学医学部附属病院の取り組み～」と題した市民フォーラムを開催しました。

4回目となる今回のフォーラムでは、最初に話題のがんゲノム医療について前田大地医学系研究科先端ゲノム医療学共同研究講座特任教授が、次にシステム化が進んだ医療環境などについて松村泰志医療情報部長が講演を行いました。続いて、名井陽未来医療開発部未来医療センター長が大学・企業間の連携や薬の開発について、最後に、澤芳樹心臓血管外科長が、質の高い臨床研究・治験を目指す取り組みについて講演を行いました。

多くの方々にご来場いただき、本院の未来医療の取り組みについて理解を深めていただくことができました。



病気が体を守ってくれている免疫学の理解は様々な病気の克服につながります。阪大は伝統的に免疫学の研究がさかんな大学で、多くの世界的な免疫学者が活躍しています。例えば阪大の免疫学研究によって開

発された薬で、炎症をおこす物質のIL-6をやっつける抗IL-6受容体抗体は、これまで関節リウマチや若年性特発性関節炎に対して使われてきましたが、高安静脈炎、巨細胞性動脈炎などにも効くことがわかり、辛い症状がとれるようになりました。こうした薬は免疫に関係する一つの物質だけを標的にするので副作用が予測できます。阪大の免疫学から生まれ、現在では世界中で使われるようになった薬なのです。

炎症をおこす他の物質や、アレルギー細胞を増やす物質を標的にした薬も普及してきました。免疫に関係しているどの物質を止めればどの病気がよくなるのか次々と明らかになってきているのです。熊ノ郷淳科長の下、免疫内科では免疫学の進歩から開発された薬を患者さまに副作用が生じないように上手に届けています。さらに、阪大の最先端の手法で免疫の病気を研究し、未来の新薬に繋がるよう取り組んでいます。

免疫学が自分自身を攻撃してしまいう自己免疫疾患や、発熱や痛みを伴う炎症が続く慢性炎症性疾患はあちこちの関節が痛くなる特徴があるため「リウマチ性疾患」とも呼ばれます。関節リウマチが代表的な病気です。書かない物質に過剰に反応するアレルギー疾患や、感染症を繰り返す免疫不全症など、免疫内科では免疫の仕組みの専門家としてこれらの病気を診療しています。市中病院で「リウマチ科」「膠原病科」「アレルギー科」などで診療している病気がいずれも免疫の異常によって生じるため、本院では「免疫内科」という名称で診療しています。

体の外からやってくる病原体をやっつけ、二度目には速やかに対処し、内からの敵である癌に対しても守ってくれる頼もしい仕組みが私たちの体に備わっています。それが

免疫内科 「免疫学の進歩を臨床現場へ届ける」

免疫です。

免疫が自分を攻撃してしまいう自己免疫疾患や、発熱や痛みを伴う炎症が続く慢性炎症性疾患はあちこちの関節が痛くなる特徴があるため「リウマチ性疾患」とも呼ばれます。関節リウマチが代表的な病気です。書かない物質に過剰に反応するアレルギー疾患や、感染症を繰り返す免疫不全症など、免疫内科では免疫の仕組みの専門家としてこれらの病気を診療しています。市中病院で「リウマチ科」「膠原病科」「アレルギー科」などで診療している病気がいずれも免疫の異常によって生じるため、本院では「免疫内科」という名称で診療しています。

総合周産期母子医療センター

ハイリスク妊娠にチーム医療で対応 麻酔科医による無痛分娩も



大園恵一センター長

母体と子ども、ふたつの命を守る 当センターは、産科、小児科(新生児グループ)を中心に、小児外科・心臓血管外科・脳神経外科・麻酔科など幅広い診療科と緊密に連携し、母体と子ども(胎児・新生児)のふたつの命を守ります。母子ともに経過が良い場合は、必要のない医学的介入はせず、母体や胎児に何らかの問題がある場合、専門的な知識・技術をもったグループが緊密なチーム医療で迅速に対応します。高度救命救急センターや成人ICU(集中治療室)の体制も整っており、胎児異常や、母体の合併症、母体救急などの患者さんが、大阪府下や京

阪神地域から多数紹介されています。最重症合併症妊産婦受入医療機関のひとつで、大阪府北部における第三次産科救急病院の使命も担っており、24時間対応の母体搬送システム(OGCS)により、ハイリスク妊娠・出産の患者さんを積極的に受け入れています。胎児期の早期診断・先進治療が可能 平成27年に胎児診断治療センターが開設され、重篤な胎児異常に対する早期診断・最先端治療が可能になりました。不整脈・胸水・貧血などを胎児期に治療することで妊娠を継続でき、誕生後の新生児の負担も軽くなります。また、採血により胎児のDNA断片を分析する母体血胎児染色体検査(NIPT)、羊水による染色体検査なども実施しています。異常が見つかった場合、臨床遺伝専門医や臨床心理士、認定遺伝カウンセラーなどによるカウンセリングを行い、治療や予後について考え、最善の体制を整えていきます。

陣痛の痛みを伴わない無痛分娩にも積極的に取り組んでおり、麻酔科医を中心とした産科麻酔チームが24時間体制で対応しています。妊婦さんやご家族の背景や思いに配慮 施設・設備面では、平成24年に新生児特定集中治療室(NICU)の拡張と新生児治療回復室(GCU)の整備を行い、GCUの6床では、より重症な新生児・乳幼児の管理が可能となりました。また、NICUで治療を受けている新生児を、お母さんやご家族が、ベッドサイドに備えたタレットなどで見守ることが出来る体制も今年度中に実現する予定です。NICUやGCUで治療を受けている新生児とご家族との面会時間についても、感染対策を強化しながらも拡大し、ご家族とともに過ごしていただける時間を増やしていきたいと考えています。当センターでは年間約600件の出産があり、妊婦さんやご家族の背景や思いに配慮した治療やサポートを心がけています。先進的な医療が必要な妊婦さんにはもちろん、合併症などがないローリスク妊婦さんの分娩も積極的に受け入れておりますので、ぜひご相談ください。

事務部長 おすすめ御膳 メニュー 鮭ごはん 鯉の唐揚げ 小松菜のお浸し(みぞれ別添え) 柚子胡椒のスープ デザート

栄養マネジメント部長 おすすめ御膳 メニュー グリーンカレー キャベツのサラダ トマトと卵のスープ デザート

おすすめ御膳 患者さんの笑顔を求めて、平成26年11月から始めた『おすすめ御膳』。 阪大病院ニュースに掲載することで、以前よりも多くの方に知っていただけるようになりました。 昨年11月の『延原事務部長おすすめ御膳』では、初めて鯉(あんこう)を使用しました。外はさっくり、中はふっくらと柔らかい食感が楽しめる鯉の唐揚げです。また、主食が粥の患者さんにも、揚げ物より消化しやすく美味しい鯉の料理を食べていただきたいと試行錯誤を重ねました。新メニューとして、魚介の旨味を活かした洋風鍋の『鯉のブイヤベース』ができました。 そして、今年3月には『栄養マネジメント部長おすすめスマイル御膳』をご提供しました。これまで下村部長おすすめ御膳では様々なカレーをご提供し、好評をいただいています。今回は、ほうれん草の『グリーンカレー』。病院食では珍しいスパイスな味に仕上げました。粥のメニューは『ビーフシチュー』で、デミグラスソースで肉をじっくりと煮込みました。新メニューのグリーンカレーとビーフシチューは、長期入院の患者さんにも喜んでいただけたようです。 どちらのおすすめ御膳も患者さん方から「まさか、病院で食べられると思っていなかった。美味しい」とご感想をいただきました。これからも病院の食事を喜んでいただけるように、日々努力してまいります。